

令和3年度

牛田・川除地区発掘ニュース

5月号

回覧

通算 34 号

発掘調査開始のお知らせ

過年度に引き続いて、今年度も県営 牛田・川除地区基盤整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を行います。5月中旬から調査を開始していく予定です。

今年度は下の地図に赤色で示した場所で発掘調査を行う予定です。5月中旬頃から、除草作業や重機による表土掘削が開始される見込みです。調査予定地が集落に近接した場所のため、調査時には大変お騒がせいたしますが、ご理解とご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

皆様に発掘調査の成果や地域の歴史をお伝えするため「牛田・川除地区発掘ニュース」を今年度も発行してまいります。今年度が発掘調査最終年度となりますが、よろしくお願いいたします。



令和3年度 発掘調査予定地

段丘上の古墳時代集落 —^{じんだしんめい}神田神明B遺跡C地点—

市給食センターの東側に建設予定の藤岡市防災公園の工事に先立って、令和元年7月から翌年5月にかけて遺跡の発掘調査がおこなわれました。神田神明B遺跡C地点と名付けられたこの遺跡では、6世紀（古墳時代後期）から11世紀後半（平安時代後期）にかけてつくられた84軒の竪穴住居跡や2,000基超のピット（土坑）、中世の屋敷跡などが見つかりました。

84軒の竪穴住居跡のうち60軒が6世紀前半から7世紀前半にかけてのもので、それより後になるとその数が大幅に減少していきます。住居数が大きく変化する7世紀前半は、昨年度調査した牛田古墳群がつくられはじめる時期と一致します。牛田廃寺跡が造営される点や竪穴住居跡が増加する点など、7世紀前半以降の生活

の場の中心が河岸段丘の下側、牛田地区や川除地区の方へと移動していったことがうかがえます。



竪穴住居跡の色分け

- …… 6世紀～7世紀前半（古墳時代後期）
- …… 7世紀後半～8世紀（飛鳥時代・奈良時代）
- …… 9世紀～11世紀後半（平安時代）

神田神明B遺跡C地点で見つかった竪穴住居跡

牛田川除地区発掘ニュース 5月号 通算 34号
令和3年5月1日 発行
発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：齋藤
藤岡市白石 1291-1（藤岡歴史館内）TEL:0274-23-5997



令和3年度

牛田・川除地区発掘ニュース

6月号

通算35号

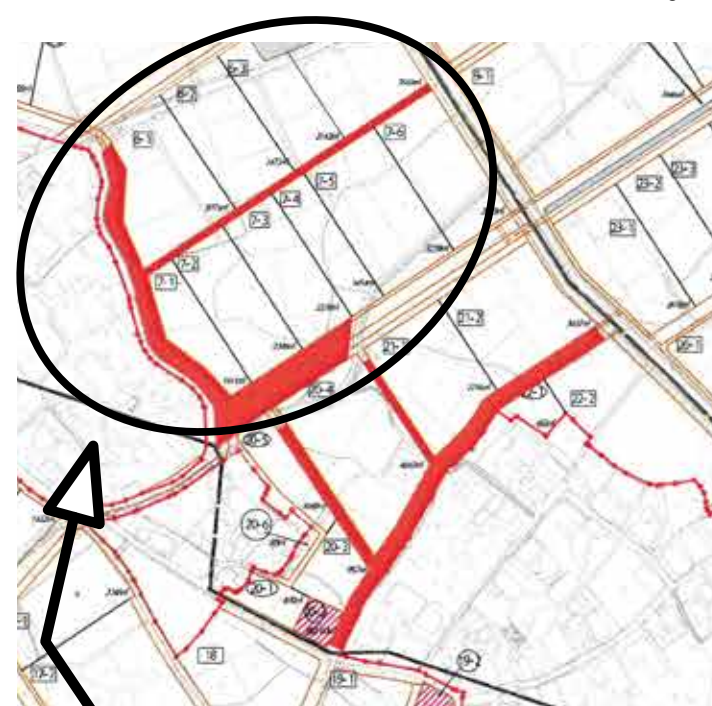
回覧

発掘調査がはじまりました

前号でお知らせしたとおり、5月中旬から草刈りや仮設トイレの搬入、重機による掘削等発掘調査の準備が始まっていますが、これに引き続いて、6月2日より作業員が参加する発掘調査を開始します。

今年度の調査範囲は水路を境にして東西に分かれていますが、西側の区画から調査に入り、東側へと移動していく予定です。安全には万全を期してすすめますが、危険ですので発掘調査中の区域には立ち入らないようお願い申し上げます。

過去3年分の調査成果では、古墳時代から平安時代にかけて営まれた集落跡がこの地区に広がっており、集落跡の北側と西側の様子が明らかとなってきました。今年度の調査では、この集落南



こちら側から調査を開始します

側の広がりを確認することが出来そうです。市指定史跡の牛田廃寺跡とは、位置や時期がきわめて近いことから、高い関係性があったと考えられます。

牛田川除地区発掘ニュース6月号 通算35号

令和3年6月1日発行

発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：齋藤・文挾

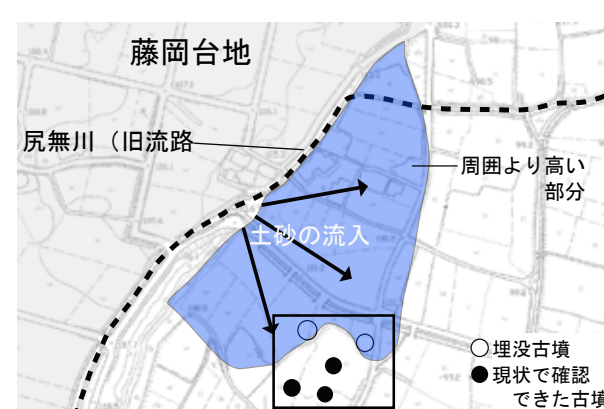
藤岡市白石 1291-1 (藤岡歴史館内) TEL:0274-23-5997

★発見された埋没古墳★

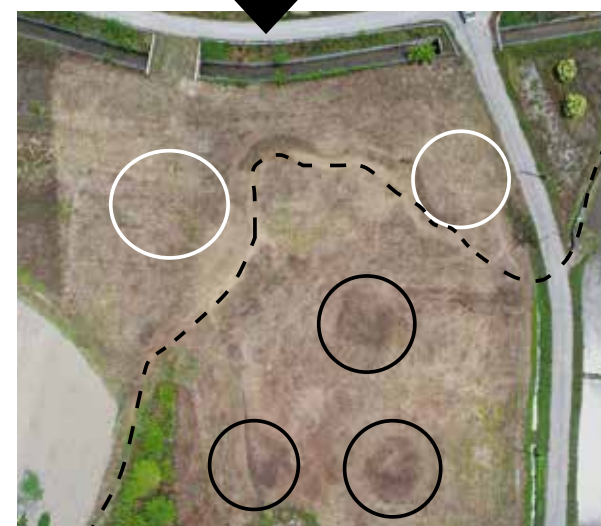
牛田古墳群では、土砂に埋没した古墳が昨年度新たに2基見つかりました。古墳は千年以上前に作られましたが、通常は土には完全に埋まっておらず、地表面に高まりが見えることが普通です。牛田古墳群の埋没状況はかなり珍しいと言えるでしょう。

埋没は古墳近くを流れる尻無川^{しりなしがわ}からの土砂によるものと思われます。尻無川周辺は1m程高くなっており、古墳は半分程度の高さまで埋まっています。埋没していた7号古墳の周溝からは浅間山の噴火に伴うAs-B軽石(1108年降下)、現地表面の表土下にはAs-A軽石(1783年降下)が見られるため、約600年の間に埋没したことがわかりました。

埋没していた古墳の状態が非常に良いことから、古墳が造られてから比較的早い時期に一気に埋まった可能性が高いと思われます。



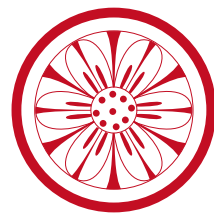
7号古墳の埋没状況



牛田古墳群 発掘調査前



牛田古墳群 発掘調査後



令和3年度

牛田・川除地区発掘ニュース

7月号

通算36号

回覧

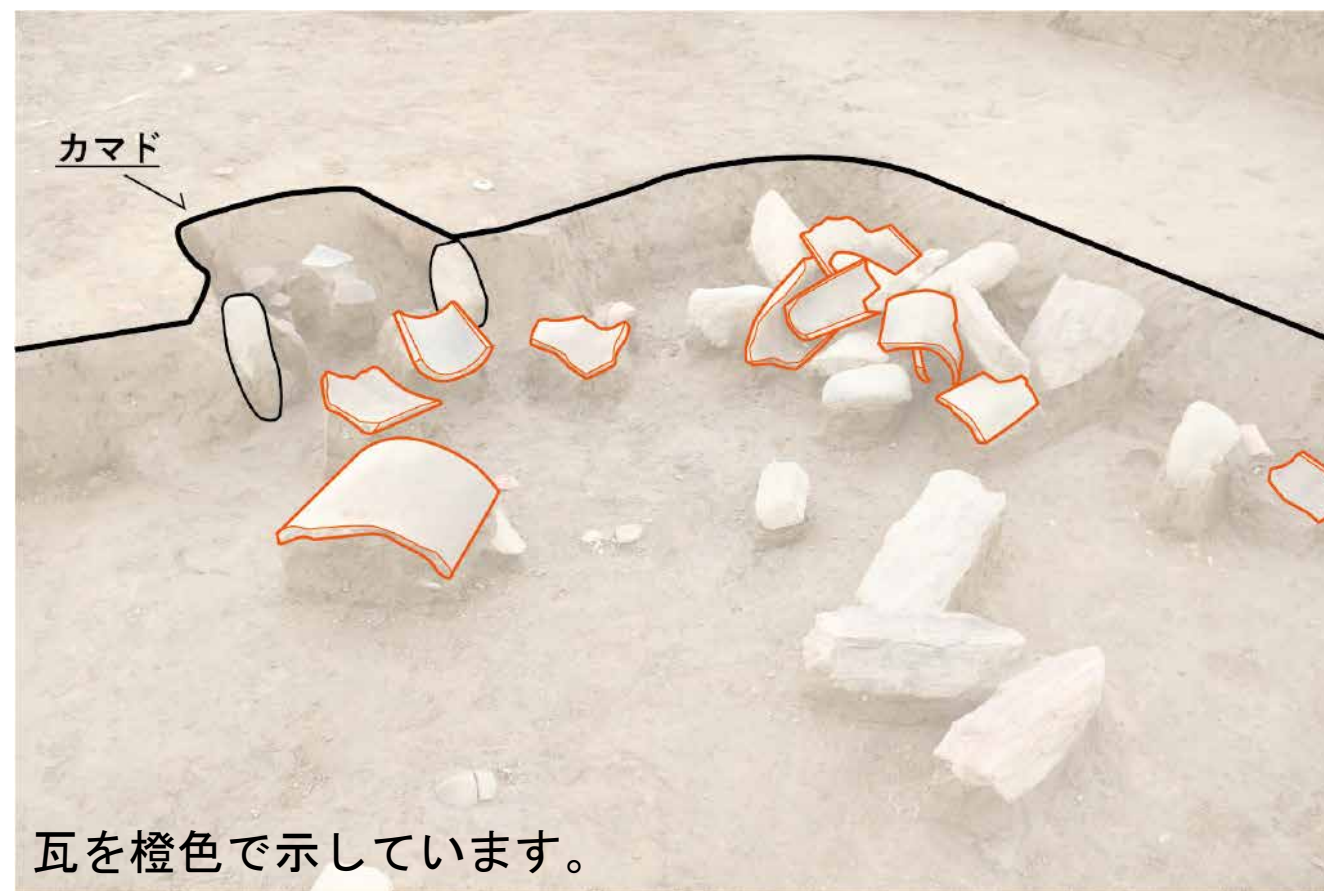
発掘調査の現況

発掘調査がはじまり、ひと月が経過しました。水路西側の調査区は重機での掘削もおわり、現在は、発見された竪穴住居跡や土坑を丹念に掘り進めています。幸いなことに調査現場は水はけが良く、梅雨の長雨にも負けず調査を進めることが出来ています。

竪穴住居から瓦が出土しました

平安時代の住居跡であるH-221号住居跡から、長さ約20～30cmの石材とともに多数の瓦が出土しました。平瓦や丸瓦などその数は併せて10枚以上にもなりますが、当時、瓦を用いる建物は寺院や役所（郡衙）などに限られており、一般的な竪穴住居跡には用いられていませんでした。そのため、この住居から瓦が数枚出土した原因として、使われなくなった住居が時間を掛けて埋まるなかで、何らかの理由で瓦が入り込んだものと考えられます。使用後の住居が埋められずに放置した場合は、周囲よりも一段低い窪地となるため、壊れた土器など当時の人々が不要になったものを投棄する場所として使われていたようです。この住居で瓦が広範囲に散らばり床面より高い位置から出土していることは、その可能性が高いことを示す要因といえます。

いずれの場合でも、人の手によって瓦が運ばれてきたことが分かります。この住居の北側約500mの地点にある牛田廃寺跡（市史跡）が廃絶したあと、瓦が持ち出され、転用されたようです。



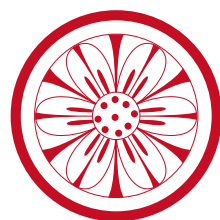
瓦を橙色で示しています。

牛田川除地区発掘ニュース7月号（通算36号）

令和3年7月1日発行

発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：齋藤

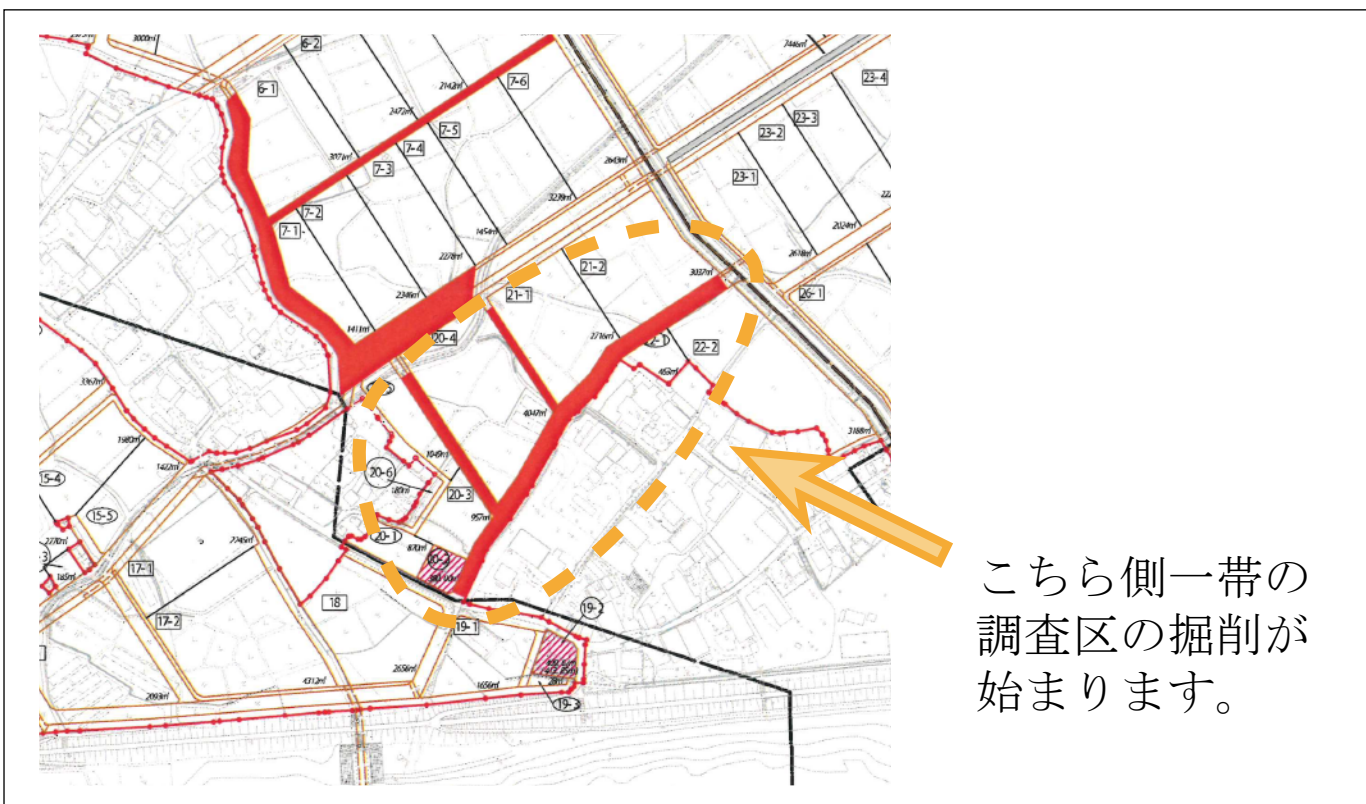
藤岡市白石1291-1（藤岡歴史館内）TEL:0274-23-5997



発掘調査の進捗状況

発掘調査が始まり、早2か月が経ちました。水路西側の区画については、現在までに竪穴住居跡約40軒と、多数の土坑や柱穴などが発見されています。古墳時代後期（6世紀～7世紀前半）から飛鳥・奈良・平安時代（7世紀後半～10世紀代）にかけて、大きな集落が営まれていたことがわかってきました。

8月下旬頃から、水路東側の調査区で重機掘削を開始する予定となっています。作業員が入り本格的に調査が開始されるのは、9月以降となる見込みです。集落に近接した場所のため調査時には大変お騒がせいたしますが、ご理解とご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。



こちら側一帯の調査区の掘削が始まります。

平安時代の鍛冶工房が見つかりました

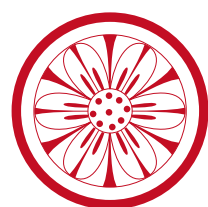
9世紀の終わり頃のH-239号住居跡では、住居の中央付近で小さな鍛冶炉跡が見つかったことから、鍛冶工房と考えられます。炉の壁と底は溶けた金属と熱によって硬くなり、一部は青黒く変色しています。住居の右隅には直径40cmほどの大きな石がありましたが、これは鍛造のために使用した^{かなとこいし}金床石だと思われます。住居のなかからは、鉄製品を鍛錬した時に火花となって飛び散った薄い鉄の欠片が数多く出土しています。

この住居からは、カマドがふたつ見つかっています。ふたつは同時に使用されたのではなく、古い方が鍛冶炉跡に近く使いにくいため、左側へとずらしてつくり直したのだと考えられます。



H-239号住居跡の全景と鍛冶炉跡

牛田川除地区発掘ニュース 8月号 通算37号
令和3年8月1日発行
発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：齋藤(市教委)、南田((有)毛野考古学研究所)
藤岡市白石 1291-1 (藤岡歴史館内) TEL:0274-23-5997



令和3年度

牛田・川除地区発掘ニュース

9月号

通算38号

回覧

弥生土器が出土しました

西側調査区の中央付近にあるD-892号土坑^{どこう}から、本市では数少ない弥生土器が出土しました。この土器は表面に櫛^{くし}のような工具で描かれた波状の文様がありますが、これは、弥生時代後期の群馬県に広く分布する「樽式土器」^{たるしき}によく見られる特徴です。

また、この土坑から東に20m程度の地点にあるH-252号住居からも弥生土器の破片が出土しています。この土器の表面には、



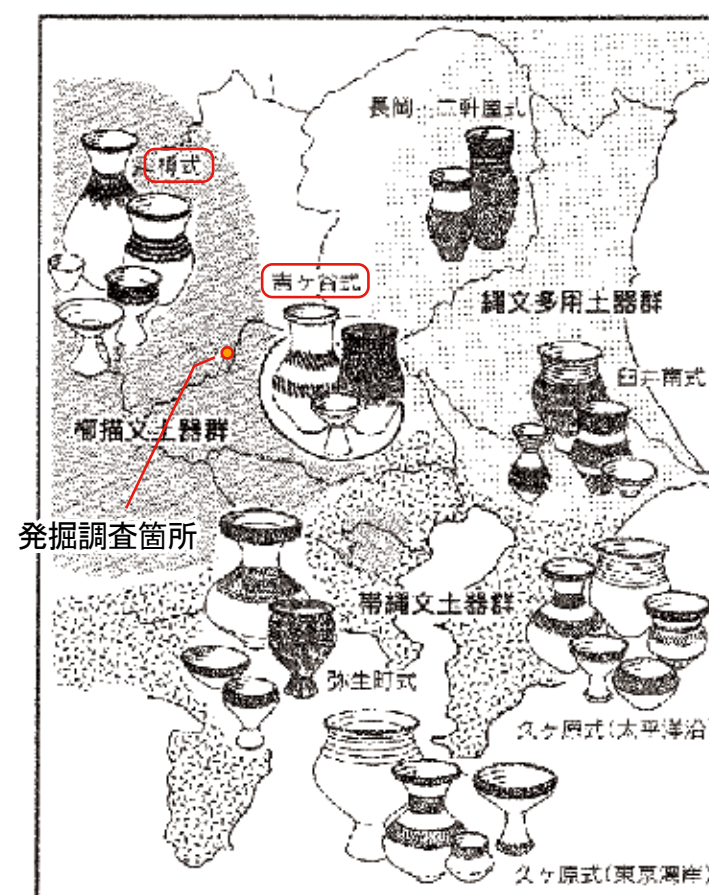
(上) 土器が出土した
D-892号土坑



(右) 土器の表面には
波状の文様が残る

D-892号土坑の土器と異なり目の粗い縄目の痕（縄文）が施されていますが、これは埼玉県域に分布する「吉ヶ谷式土器」^{よしがやつしき}に見られる特徴です。この2つの土器から、弥生時代後期の藤岡には群馬と埼玉、それぞれの地域で流行した土器が入ってきていたことが分かりました。

これまで藤岡市域では弥生時代の遺跡はほとんど発見されておらず、小野地区や平井地区などで弥生時代前期の遺跡が数か所見つかっている程度でした。今回の発見は、これまでの遺跡と地点や時期が異なることから、藤岡市の弥生時代の様子を知るうえでおおきな手掛かりとなりそうです。



弥生時代後期の関東地方の土器分布図
(高崎市観音塚考古資料館第31回企画展
『群馬に古墳が造られ始めたころ』図録より)



H-252号住居から出土した弥生土器片

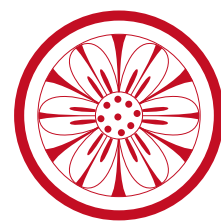
牛田川除地区発掘ニュース9月号 通算38号

令和3年9月1日発行

発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係

担当：齋藤

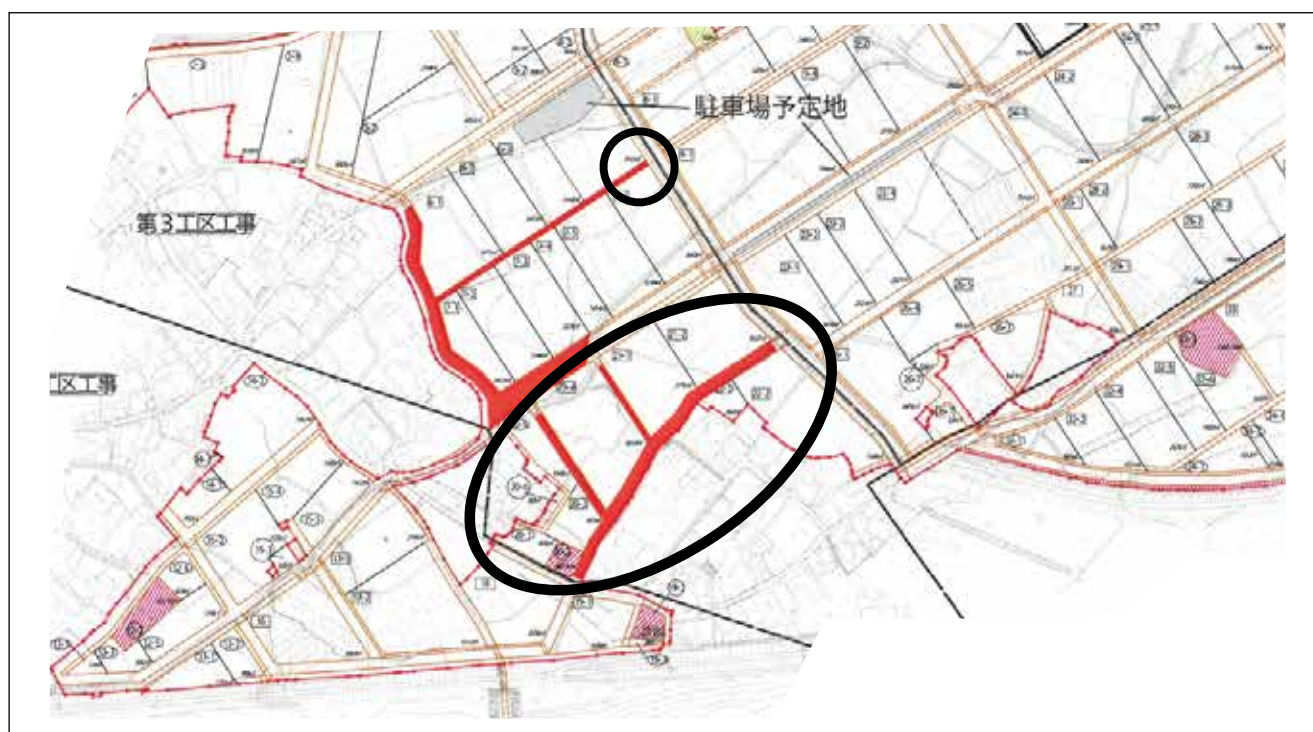
藤岡市白石1291-1（藤岡歴史館内）TEL:0274-23-5997



東側調査区の発掘を開始しました

発掘調査開始から4か月が経過し、幹線水路西側の調査も大詰めとなってきました。水路東側の区画についても、8月末から重機による掘削作業を進めていましたが、9月中頃より遺構の掘削も開始しています。こちら側での調査成果については、来月以降の発掘ニュースのなかでご紹介出来ればと考えております。

離れた2地点で調査が進みますので、作業員が移動のために現場周辺の道路を利用することがあります。移動経路等には十分配慮して調査を進めておりますが、付近を通行される際には歩行者にご注意ください。



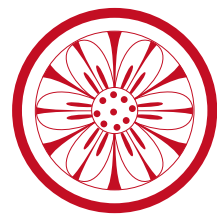
今後の調査箇所（図中で丸を付けた部分）

土地に合わせた住居づくり

水路西側一帯の調査区では、神流川の影響によって堆積したとみられる石や砂利などの混ざった土が、遺跡のある面のところどころに顔を出しています。この場所は掘りにくく崩れやすいため、竪穴住居などをつくるには不向きですが、現場ではこの土を掘り込んでつくられた奈良時代や平安時代の竪穴住居が何軒も発見されました。そのうちの1軒であるH-298号住居では、カマド周辺の壁を石で補強し崩落を防ぐ対策を行っていた様子が確認されました。古代の人々は、悪条件の土地でも暮らしていけるよう、様々な工夫を行いつつ住居をつくっていたようです。



H-298号住居の石組みカマド



令和3年度

牛田・川除地区発掘ニュース

11月号

通算40号

回覧

竪穴住居と土器の関係 —床面直上・流れ込み・廃棄—

竪穴住居を発掘すると大小さまざまな土器が出土しますが、“何が出たか”を知ることと同様に、“どのように出たか”を把握し、記録しておくことが重要な作業となります。

竪穴住居における土器の出土の仕方は、大きくわけて次の3通りがあります。①住居の床面に置かれた、または倒れた状態で出土するもの（裏面上段）、②住居が埋まるなかで入り込んだもの、③住居が埋まるなかで人為的に入れられたもの（裏面下段）です。それぞれのパターンを①床面直上、②流れ込み、③廃棄として、状態ごとに区別しています。流れ込みも廃棄も住居が使われなくなった後で入り込んだ点では共通していますが、後者の場合には、大量の土器が折り重なるように出土すること、川原石なども一緒に入り込むことが特徴となっています。

土器はつくられた時代・時期で大きく形や文様が変化していくため、「年代のものさし」と呼ばれることもあるほど、出土した住居の時期を決める大きな手掛かりとなっています。土器そのものだけでなく出土状態も併せて考えることで、床面直上の遺物は住居が使われていた時期を、流れ込みや廃棄の遺物は住居が使われなくなったあとの年代を示す

資料として扱うことが出来ます。

牛田川除地区発掘ニュース11月号 通算40号

令和3年11月1日発行

発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係

担当：齋藤

藤岡市白石1291-1（藤岡歴史館内）TEL:0274-23-5997

H-281号住居 —床面直上の土器群—



完全な形を保ったまま残されていた土器群。左上の写真中央に写る土器はカマドに掛けられていた煮炊き用のカメで、その上に乘せられていた土器も残っている。

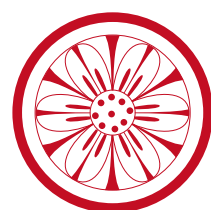


H-263号住居 —廃棄された土器群—



色々な種類の土器の破片が何層にも重なっている。右の写真では、床に置かれた土器と廃棄された土器で、出土した高さが異なっていることがわかる。

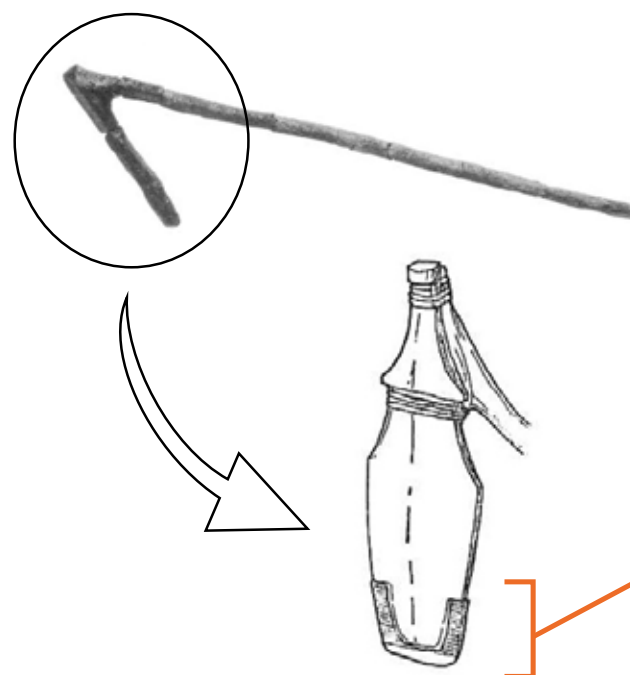




鉄製鍬先が示すもの ―古代寺院との関係性―

牛田・川除地区で4年間にわたり続いてきた発掘調査も、いよいよ最終盤となってきました。過去の発掘ニュースでもなんどこお伝えしてきたように、これまでの調査では7世紀から9世紀ころの住居が数多く発見されていますが、現在調査を進めている西側の区画では、10世紀の竪穴住居も数多く確認され、集落の存続時期がより長期間にわたることが明らかとなってきました。

古代のT-3号竪穴状遺構（※竪穴住居と断定出来ないものをこう呼びます）から、長さ・幅ともに20cmを超える大形の鉄製鍬先が出土しました。藤岡市域では初の出土例で、群馬県内でも十数



（上）県内の遺跡から出土した鍬
（前橋市 元総社寺田遺跡）



T-3号竪穴状遺構から出土したU字形鍬先

（下）鍬先の装着復元図

例程しか確認されていない貴重な遺物です。関東地方・東北地方の鉄製鍬先について研究している林正之さんの論文によれば、①群馬県内で同じU字形の鉄製鍬先を出土する遺跡は、ほとんどが古代寺院や官衙など政治的拠点のすぐそばにつくられた集落遺跡であること、②大きさがほぼ同一である（＝規格性がある）ことなどが指摘されています。

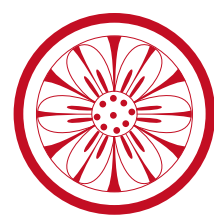
林さんは、こうした2つの事実から、鉄製鍬先は当時の支配者層により生産や流通が管理されており、とくに行政上で重要な集落に限定して流通させていた物だと結論付けています。遺跡が東山道のそばに集中していることも、この結論に合致します。

これまでの発掘調査で、牛田川除地区では古墳群や古代寺院、石で舗装された古代道路も見つかっており、政治や宗教、交通と

様々な面で重要な地域であったことが分かってきています。古代寺院だけでなく400軒近い竪穴住居がつくられるなど、牛田・川除地区が7世紀以降に急速に発展していった背景には、この地を重要視する古代上野国の政治的な動きがあったのかもしれません。



古代上野国のU字形鍬先出土遺跡と古東山道



令和3年度

牛田・川除地区発掘ニュース

1月号

通算42号

回覧

4年間にわたる発掘調査が終了しました

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。平成30年度に開始した牛田・川除地区での発掘調査が、昨年末ですべて終了しました。この4年間で、市内でも数少ない弥生時代の遺構や模様積み石室をもつ古墳群、新発見の古代寺院とその下に集った人々の集落など、藤岡の歴史を考えるうえでたいへん重要な遺跡が数多く見つかりました。

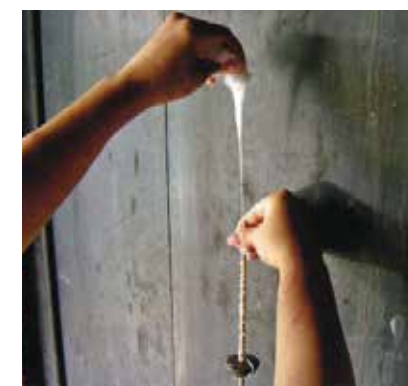
来年度以降は、発掘調査報告書の刊行に向けて発見された遺構や遺物の整理作業をおこないます。作業の様子や新たな発見などは、今後も発掘ニュースで皆様にお伝えしていきます。



牛田・川除地区遺跡群（令和3年度調査部分）

寺院へのあこがれ？ —^{れんげもん}蓮華文の描かれた^{せきせいぼうすいしや}石製紡錘車—

紡錘車は繊維を撚り合わせ糸にして巻き取る道具のはずみ車です。古墳時代から平安時代に多く出土し、ごくまれに文字や記号が刻まれています。漢字一文字だけのものが多く、なかには地名や人名、神仏への信仰を示す文章が記されたものもあります。



紡錘車の使用例

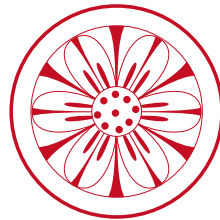
H-343号住居から出土した石製紡錘車には5枚の花びらとそれを囲む円が描かれていました。これは牛田廃寺の瓦にみられる蓮華文をモチーフにしたものだと考えられます。紡錘車に描かれたものは形がいびつで花びらの枚数が1枚足りないなど、やや粗雑な印象を受けますが、瓦の凹凸を表現するための細かい刻みが入っており、実物をよく観察して描いたことが分かります。牛田廃寺は、周囲に住む人々にとって特別な存在だったようです。



牛田廃寺出土軒丸瓦の蓮華文

H-343号住居出土の紡錘車

牛田川除地区発掘ニュース1月号 通算42号
令和4年1月1日発行
発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：齋藤
藤岡市白石 1291-1（藤岡歴史館内）TEL:0274-23-5997



令和3年度

回 覧

牛田・川除地区発掘ニュース

2月号 通算43号

整理作業を開始しました

平成30年から開始した牛田・川除地区の発掘調査が12月で完了しました。4年間の発掘調査で、古代寺院（牛田廃寺）3棟・終末期古墳7基・道路状遺構2基・竪穴住居跡約400軒、土坑ピット約1700基など大量の遺構が見つかり、藤岡市を代表する奈良・平安時代の大遺跡であることが明らかになりました。また瓦・土師器・須恵器といった当時の人々が使用した道具が、遺物収納箱で500箱以上出土しています。

出土した遺物は、泥だらけで破片になっているため、遺跡の内容を知り、藤岡市の郷土史を復元するには、出土した遺物を整理して発掘調査報告書としてまとめる必要があります。発掘調査報告書を刊行して初めて、その発掘調査が完了となります。



写真1：牛田廃寺跡の瓦出土状況

牛田廃寺出土瓦の接合作業

令和3年度から発掘調査と併行して、牛田廃寺から出土した瓦の整理作業を本格的に開始しました。

遺跡から出土する遺物は、土圧や自然環境、人為的な影響等で完全な形で出土することは極めて稀で、多くは割れた状態で出土します（写真1）。破片の状態では全体の形状や特徴がわからないので、これを元の形に近づける作業が「接合」です（写真2）。

遺跡から持ち帰った遺物を広げ、一つ一つ接合するか確認していきます。同じものがうまく見つければ、写真3・4のような形にすることができます。

次号では、接合の結果わかった牛田廃寺の瓦の内容について紹介します。



写真2：接合作業の様子



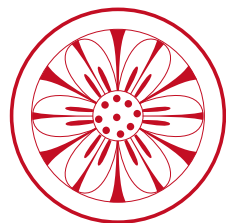
写真3：接合した瓦



写真4：元の形になった瓦



牛田川除地区発掘ニュース 2月号 通算43号
令和4年1月31日 発行
発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：文挾
藤岡市白石 1291-1（藤岡歴史館内） TEL:0274-23-5997



令和3年度

回 覧

牛田・川除地区発掘ニュース

3月号

通算 44 号

古代寺院の屋根瓦

2月号では瓦の接合作業を紹介しました。牛田廃寺は「^{ほんかわらぶ}本瓦葺き」という瓦の^ふ葺き方をしており、今号では主な瓦の葺き方について見ていきたいと思います。

瓦は日本発祥の部材ではなく、仏教伝来とともに寺院建築技術の一つとして6世紀末に大陸から伝わりました。今では個人住宅に瓦を葺くことは一般的ですが、当時は寺院などの特別な建物にしか使われない建築部材なので、普通の遺跡からは滅多に出土しません。

古代の瓦は、「本瓦葺き」と呼ばれ、今とは瓦の^{まるがわら ひらがわら}葺き方が違い、丸瓦と平瓦という別の瓦を組み合わせます(写真3)。複数の瓦を組み合わせ、瓦を固定するのに練った土を使うため、屋根が非常に重く、大きな荷重がかかり頑丈な建物基礎が必要です。非常に手間が掛



写真1：本瓦葺きの屋根瓦（奈良県元興寺）



写真2：棧瓦葺きの屋根瓦（藤岡歴史館）

※立体的な本瓦葺きの方が重厚で、扁平な棧瓦葺きは洗練された印象の屋根景観となる。

かりますが、立体的な迫力がある屋根景観となり、今でも古い寺院などは本瓦葺きとなっています(写真1)。

一方、江戸時代に考案された「^{さんかわらぶ}棧瓦葺き」は、別々だった丸瓦と平瓦を一体化し、下地の棧（瓦を引っ掛ける細い横棒）に掛けて使用します。安価で軽量のため広く普及し、現代まで使用されています(写真2・4)。

牛田廃寺は本瓦葺きなので、丸瓦と平瓦が大量に出土しました。復元の結果、写真3のように組み合わせることが出来ます。

現代でも同じですが、瓦は壊れると壊れた部分だけ差し替えることができるため、1つの屋根に古い瓦と新しい瓦が混在することになります。

牛田廃寺の瓦を細かく観察すると、作り方によっていくつかの種類があり、瓦の葺き替えをしていくことがわかってきました。(続く)

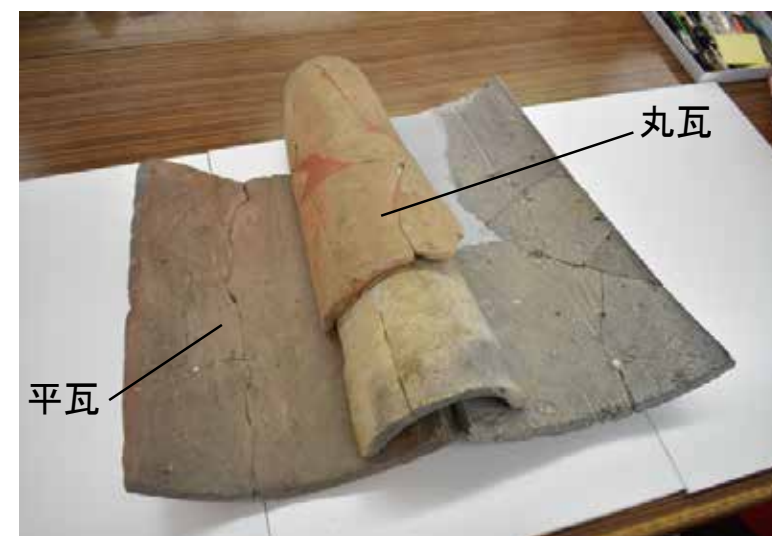


写真3：本瓦葺きの葺き方
(牛田廃寺跡出土の瓦)



写真4：棧瓦葺きの葺き方（高山社跡長屋門）

牛田川除地区発掘ニュース 3月号 通算 44 号
令和4年2月28日 発行
発行：藤岡市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財係
担当：文挾
藤岡市白石 1291-1 (藤岡歴史館内) TEL:0274-23-5997